

masquerade part nine

number 9

限定100部の内の11/100

edited by dr masato mugitani

タンバリン

麦谷真里

(はじめに)タイトルを見て、「え？タンバリン？」と思われた方がいらっしゃるかもしれません。いまさら、タンバリンなんて自分は演らないし、特に興味もないと思われる方もおられると思います。地方のアマチュア・マジシャンズ・クラブには、なぜか、タンバリンの名手がいて、発表会でも非常に上手に演じられるのをときどき見受けます。しかし、寡聞にして、職業奇術師がやっているのを観たことはありません。そういう意味では不思議な手品です。

日本で販売・入手されているタンバリンは、(株)テンヨーの商品に代表されるように、直径10cm程度の小振りのものが多いです。しかし、実際の楽器のタンバリンは、もっと大きいわけですから、世界の手品市場では、むしろ楽器に近い大きさのものの製造販売が主流です(写真252)。



写真252

楽器のタンバリンと同じくらいの大きさの商品は、いまでも Owen のカタログには見られますから、現在もこの大きさのタンバリンが商品として売られているということは間違いありません(径約25

cmと径約35cmの2種類)。ただし、この大きさの手品用タンバリンが日本で販売されているのを見たことはありません。Owen のカタログの記載によると、大判のシルクが30枚から50枚出せると書いてありますから、その容量の大きさは推察できると思います。

タンバリンは、いまさら種明しをするまでもなく、中空の筒の両側に新聞紙もしくは紙を金属の箍(タガ)で固定し、完全に空だと思われた筒の中からシルクやテープが大量に出て来る手品で、筒とほぼ同じ大きさのロード・チャンバーをひそかにタンバリンの中に入れるものです。ロード・チャンバーはなかなかいい日本語がなくて、筐体などと書くとかえって何のことだからわからなくなるので、この際、英語をそのまま使っています。写真252に掲げたものは、Owen のものはもちろん、Merv Taylor や Thayer など、すべて、かつて実際に手品市場で売られていた製品です。

1. ロード・チャンバーをひそかに挿入すること

タンバリンが観客の驚きを誘うのは、一にも二にも、空っぽだと思われていたタンバリンからシルクやテープが大量に出て来ることです。取り出したシルクの束や巻き上げたテープの束から、さらに大きな鳥や鳥籠や旗が出て来るクライマックス現象は、まあ、「追加の手品」なので、いまのところ念頭にないものとしします。

ロード・チャンバーにもいろんな種類がありますが、それは後で検討することとして、まず、これをひそかに筒の中に挿入するには、大きく分けて3つの方法があります。

- ①マジシャンの上着の下などに隠しておいて、そこからひそかにロードする。
- ②テーブルの下などに隠しておいて、そこから筒の中にロードする。
- ③助手がひそかに運んでロードする。

まず、①のマジシャンの身体からロードする方法は、タンバリンの径が小さい場合は可能ですが、大きいものでは、不可能とまでは言いませんが、かなり難しいです。径の小さいものでさえ直径10cm×高さ5.5cmはあるのですから、通常の上着の内ポケットには入りませんし、スーツの内ポケットの位置は意外に高いので、別の「袋」を用意する必要があります。連盟の長谷川智氏は左脇の下に挟むという解説をされています。径の大きいものについては、さらに工夫が必要です。

②のテーブルからのロードについても、いくつか方法があります。もっとも単純なのは、テーブルの下に棚などに隠して置いて、広げた新聞紙の陰で取り上げて来るやり方です。これでも十分に演技には耐えられます。また、径の大きなタンバリンでは、どうしても、テーブルからロードするやり方が主流になります。さらに、後述のように、エレベーターの付いた特殊なテーブルを使うと、観客から見るとフラットなテーブルの上で、ひそかにタンバリンの中にロードできるので、手品としては秀逸ですし、おそらく径の小さなタンバリンの演技しか観たことのない日本のマニアの方々は、あの大きなタンバリンに、どこからロード・チャンバーが入ったのかわからなくて、相当に驚かれることと思います。ただし、タンバリンを演じるために、このエレベーター付きの大きなテーブルを運ぶのは、なかなか億劫です。

③の助手を使う方法は、(株)テンヨーのサイトにもマリックのやり方が簡単に紹介してありますが、助手を使うのであれば、かなりのヴァリエーションが考えられます。

2. タンバリンから何を出すか

欧米の奇術用具店のカタログを見ると、タンバリンは、「シルク・マジック」の項に入っていることが多いです。私がよく参照するタネンのカタログ No.1(1949年)でも、シルク・マジックの項に分類されています(写真253)。

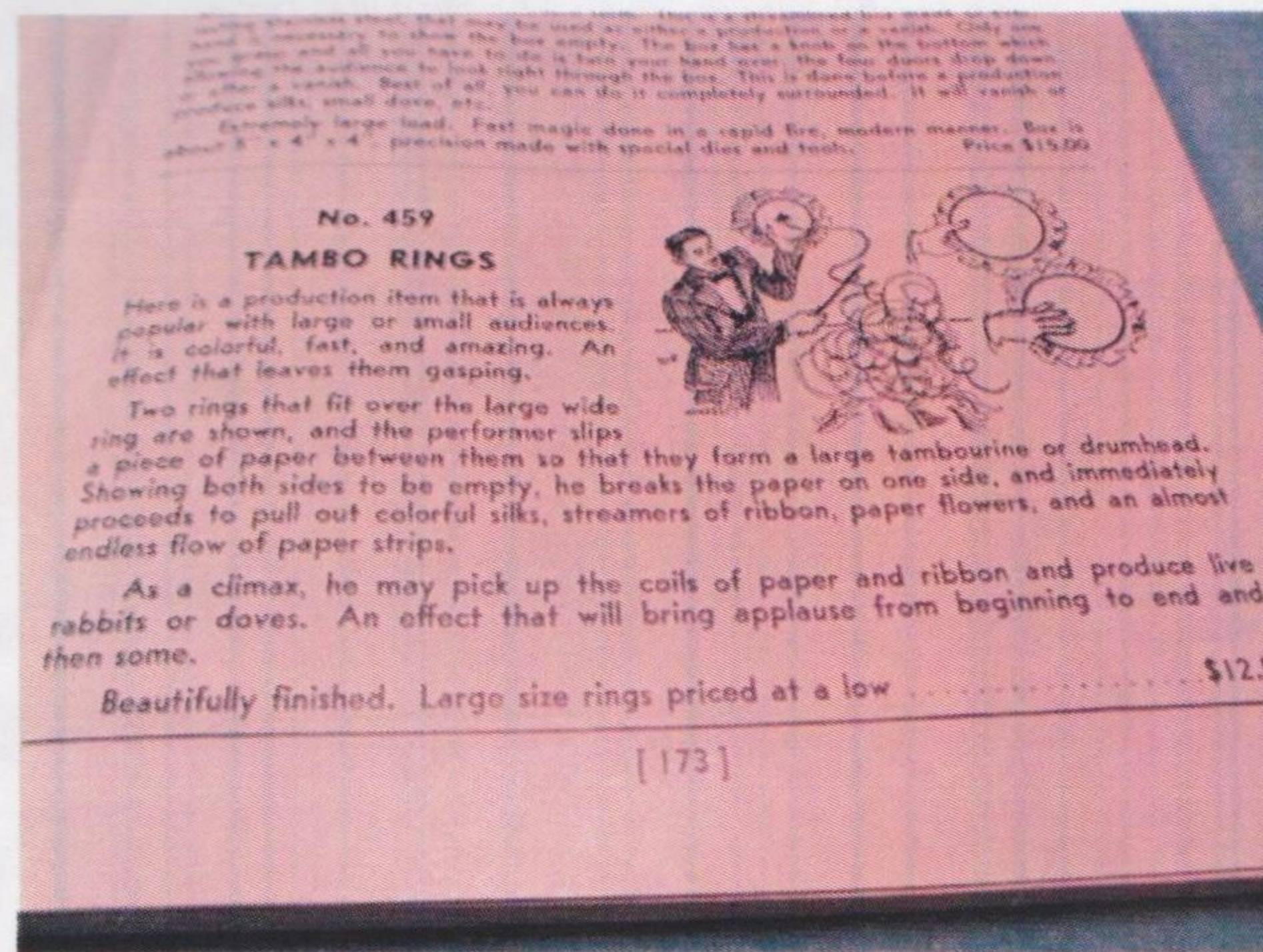


写真253

このときのタネンの価格は、12ドル50セントとなっていて、この年に1ドルは360円とレートが設定されましたから、単純換算で4500円ですが、もちろん当時4500円では買えなかったと思います。ちなみに、この同じタネンのカタログの別のページに載っているいわゆる「テレビジョン・カード」は価格が10ドルですから、タンバリンの値段の高さがわかると思います。カタログの記述には大きさなどの情報はありますが、絵を見れば、日本で使われているような小さなものでないことは明らかです。シルクが大量に出て、最後にテープが出ます。このテープを巻き取るところがタンバリンの演技の圧巻で、観客席から拍手の来る部分でもあります。加えて、マジシャンは、この巻き取ったテープを両手に持って、この中から鳩や兎を出すのです。そういう意味でも、手品らしい手品です。ということで、タンバリンから直接出て来るものは、シルク、万国旗、リボンもしくはテープ、が主たるもので、場合によっては、ミリオン・フラワーでしょうか(写真254)。



写真254

3. タンバリンの大きさ(径)

タンバリンから出て来る品物の量は、当然ながら、タンバリン(ひいてはロード・チャンバー)の大きさに比例します。観念的に言っても理解は難しいので、実際に、どれくらいの量を出せるのか、シルクで比較してみました。この場合、テープも、小さいタンバリンでは1個しか収納できませんが、大きなタンバリンでは2、3個収納できます。したがって、比較するまでもないのですが、テープを巻き取る現象は1個分で十分で、2個も3個も繰り返して巻き取るのは演技が冗長になって現実的ではありません。したがって、タンバリンの径が大きくても小さくても準備するテープは1個ということで、シルクで比較します。

シルクの大きさは、小型のタンバリンの場合、最初に15cm角ほどのかなり小さなシルクを何枚か出すマジシャンもありますが、観客の驚きという観点からは、あまり小さなものでは、見栄えがしませんし、せっかくタンバリンから出したのに、フィンガー・チップなどの別のところから出したと疑われかねませんから、ここでは45cm角と60cm角とを使うことにします。容量の比較のために他の物は入れず、シルクだけを、実際のセットのときのように、端を絡めて入れてみました。

タンバリンの直径	シルクの枚数(45cm角)	シルクの枚数(60cm角)
9cm(テンヨー製)	7枚	4枚
24cm	29枚	19枚

これは、タンバリンの容量を見るために行ったもので、言うまでもなく、ただシルクを順に出すだけでは演技が単調になってしまいます。シルクを出すことを基本として、万国旗や、場合によっては「のべシルク」などを出す変化が必要です。そして最後はテープを巻き取ることになります。

容量から言うと、「シルク・マジック」としては、やはり大型のタンバリンのほうに圧倒的な枚数がありますので、出したシルクをテーブルの上などに山のように重ねて行く演出なら、大型のほうに軍配が上がります。もちろん、取り出したシルクの山の中から鳥籠や鳩などを出すのは言うまでもありません。

参考までに、楽器のタンバリンと手品用の大型タンバリンとの見た目の大きさの比較をしておきます(写真255)。



写真255

4. プロダクション用の品物のセット

ロード・チャンパーにプロダクション用の品物を入れるときに留意することがあります。新聞紙や紙を箱(タガ)で固定したタンパリンの片面に指で穴を開けて、品物を取り出すこととなります。これは概ね中央付近を想定して、そこに最初に取り出すシルクをセットしておきます。しかしながら、穴は小さいので、シルクを取り出したら、次のシルクを探すのは、そう簡単ではありません。そこで、シルクとシルクの端を、何重かに絡ませておきます(写真256)。



写真256

取り出すシルクを次々と絡ませておくと、最初のシルクを取り出したときに、次のシルクの端が穴から出て来ますので、取り出し易いのです。日本蒸籠や顕晦箱のように、途中で改めたり、取り出した品物を再び消したりする必要がないので、シルクの次に出すものも、たとえば万国旗なら、万国旗の紐の端とシルクの端とを絡ませておきます。ミリオン・フラワーなどはゴム等で束ねておいて、そのゴムに紐をつけ、その端と絡ませておきます。テープも同様に、最初の端と、その直前に出す品物との端を絡ませておきます。テープは、かつては、手品用でない普通の市販の紙テープを一旦解いて、それを巻き直して中央から取り出していましたが、近年では、奇術用具店で、プロダクション用の紙テープやリボンが販売されていますから、それを使います(写真257)。



写真257

5. 小型のロード・チャンバーの取り出し方

(1) 上着の内ポケットから

(株)テンヨー・タイプの小型のタンバリンで考えます。径はともかく、厚さがあるので、普通の上着の内ポケットでは、収納できても、取り出すのが容易ではありませんから、前述のように大きめの袋を上着の左内側に取りつけます(写真258)。取り外しできるように安全ピンで取りつけます。



写真258

高さは、右手で容易に中のロード・チャンバーが掴める位置にします。また、実際に練習してみるとわかりますが、左肩を前に出すと、上着の左側も自然に前に出て、そこに広げた新聞紙が重なりますから、新聞紙と上着で、観客からの視線は完全に遮られ、右手でロード・チャンバーをひそかに取り出して来ることは容易になります(写真259)。



写真259

[実際の演技]

タンバリンの両面に籐(タガ)で新聞紙を嵌めた状態から解説します。ここまでは、ゆっくりタンバリンの中が空であることを確認しながら行います。2枚目の新聞紙を嵌めたら、一旦、タンバリンの両面を見せることになりますから、タンバリンを水平方向に裏返しながら、右手でロード・チャンバーをひそかに取って、マジシャン側の面から嵌め込みます。大事なことは、動きを止めたり、完全

に右手が新聞紙で隠れたりする瞬間を作らないことで、これは、タンバリンを水平方向に回転させる動作の陰で行ないます。もちろん、実際は右手が観客の視線から完全に隠れる瞬間はありますが、観客がそのように感じない動きという意味です。

(2) テーブルの下から

ロード・チャンバーはマジック・テーブルの下に入れておきます(写真260)。後から取り出しやすくするために、この部分に斜めにスロープを作っておくマジシャンもいます。



写真260

マジック・テーブルは必須ではありませんが、ロード・チャンバーを隠して置いておくスペースのあるテーブルが必要です。

この場合、両面に新聞紙を箍(タガ)で嵌めたら、最終的に、テーブルの上で、箍(タガ)を確実に固く嵌めるような動作を行ないます。このとき、広がった新聞紙で、テーブル上が隠れますから、同時に、左手でテーブル下のロード・チャンバーをひそかに取り出して、新聞紙の陰でタンバリンに挿入します(写真261)。

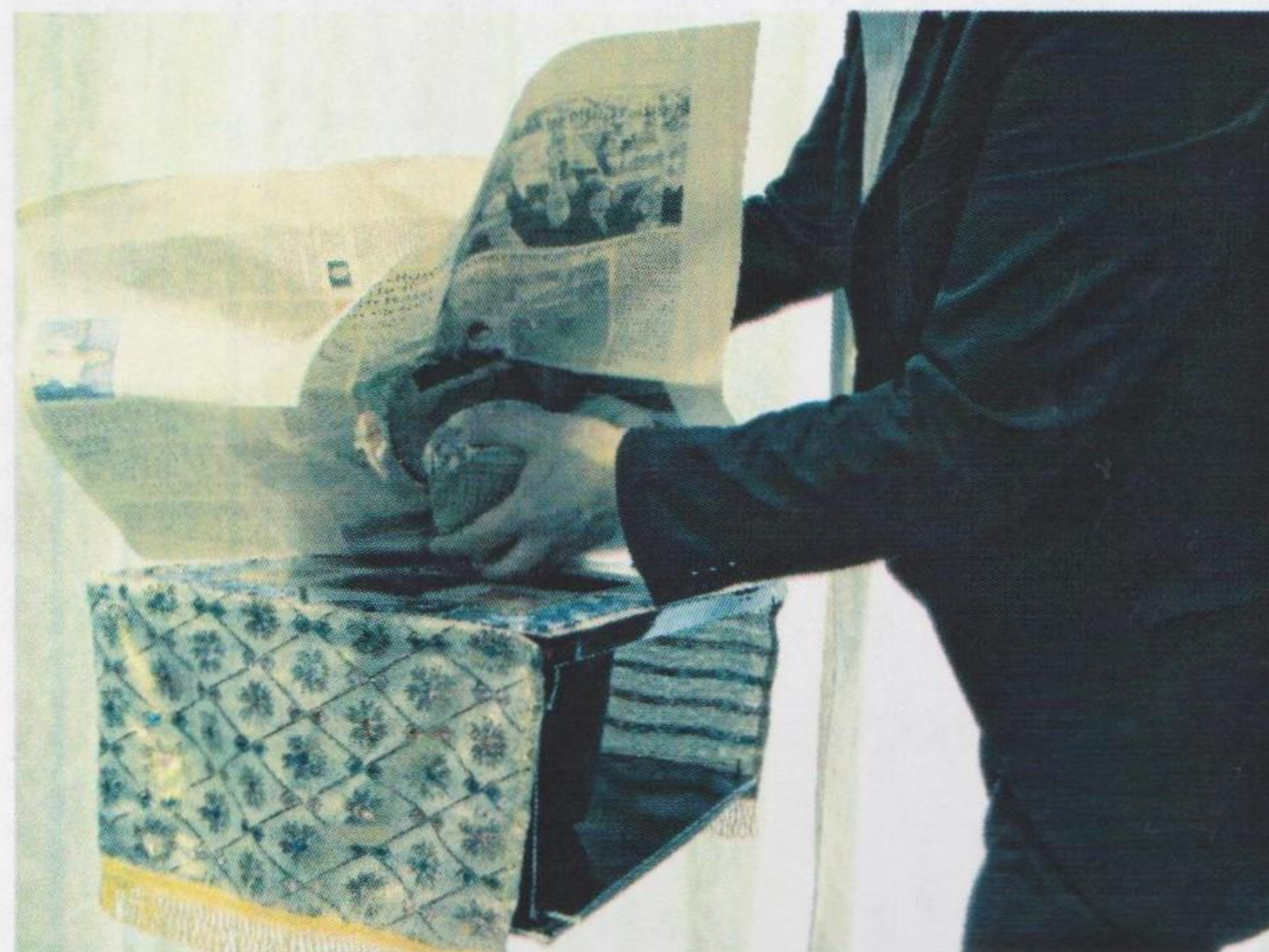


写真261

上着の内ポケットからであろうと、テーブルの下からであろうと、いずれの場合も、ロード・チャン

バーを挿入したあとは、タンバリンの両面を見せながら、余分な新聞紙を破くこととなります。実は、私は、この部分が好きではありません。タンバリンの両面に新聞紙を1ページずつ籬(タガ)で嵌め込んで、そのあとで、タンバリンの外に出ている余分な新聞紙を手で破く動作が、どうしてもエレガントに見えません。そもそも、(株)テンヨー・タイプの小型のタンバリンの場合、新聞紙1ページはあまりにも大きいのです。大きすぎるために、余分な分を破く動作は、どうしても乱暴になります。破った部分をくしゃくしゃにして床に投げ捨てるマジシャンもいて、演技としては美しくありません。タンバリンの大きさを考えると、2分の1ページ、あるいは4分の1ページで十分なのですが、それではロード・チャンバーを新聞紙の陰でひそかに入れることが難しくなります。

それで2つのことを提案します。新聞紙の大きさは、ロード・チャンバーを挿入できる2分の1ページくらいにして、余分な部分を破くときは、何回かに分けて、ゆっくり丁寧に破いて、破いた部分は、棄てバックなどに入れることにします。余分な新聞を豪快に破くことがタンバリンのダイナミックな演技だと思っている方には、手品にはそれぞれ演者のスタイルというものがありますから、もちろんそれを尊重して、敢えて強制はしません。

6. 大型のロード・チャンバーの取り出し方

(1) 上着の中から

大きな内ポケットを装着することもできないことはありませんが、ポケットから持ち上げる動作が余計な動きになりますので、革製のベルトに吊り下げておく方法が良いと思います。ただし、このようにセットすると、マジシャンの動きが制限されますので、奇術大会でタンバリンだけを演じるのなら問題ありませんが、ショーとしていくつかの手品を演じる場合、どうしても、一連の演技の最初にタンバリンを演じなければなりません。それが欠点と言えば欠点です。

革製のベルトにフックを付けて、そこにロード・チャンバーを引っ掛けておきます(写真262)。



写真262

ズボンのサスペンダーでもいいのですが、サスペンダーは多くの場合は伸縮性があるため、ロード・チャンバーを吊り下げた場合に、重みの分だけ下に沈みますので、人によってはそのことが気になります。写真の革製のベルト状のものは、ファッション・デザインの一部として市販されている

もので、それを手品に応用しただけです。もちろん、このために革製のベルトを加工して作られてもかまいません。タンバリンを下げるフックは、ベルトに接着剤で装着してもいいですし、上下の調整をしたいのなら、マリーニの氷のときにセットしたように、裏面に磁石もしくは金属の付いたフックを、ベルトの裏面からネオ・マグネットで固定すると、タンバリンの大きさによって、位置が上下できるので便利です。

やり方は基本的に小型のタンバリンのときと同じです。拡げられた新聞紙の陰で、上着の内側からロード・チャンバーを取り出して、観客側とは反対の面に挿入します(写真263)。



写真263

(2) テーブルを使って

大型のタンバリンの場合は、小型のときと同じように、テーブルの下に隠しておいて、それを新聞紙の陰で取り出してきて裏側から嵌める方法もあります。最初からテーブルの上に出しておいて、それをそのままタンバリンの筒の中に入れてしまうやり方もあります。前者は小型のタンバリンの場合と同じですので割愛して、後者のやり方を解説します。まず、取り出す品物を詰め込んだロード・チャンバーは、テーブルの上に平らに置いておきます(写真264)。このままでは観客からも見えますので、この上に1ページ大の新聞紙を拡げた状態で複数枚重ねておきます。



写真264

重ねた複数枚の新聞紙の上には、タンバリン本体の筒の部分や箍(タガ)をやや端に寄せて置いておきます(写真265)。ロード・チャンバーによる新聞紙の膨らみが目立たない程度に新聞紙やタンバリンをセットしておきます。



写真265

まず、タンバリンの胴体を観客に示し、完全には何もないただの平たい筒であることを示します。次に、テーブルの上から1ページ大の新聞紙を取り上げて、それを筒に被せ、箍(タガ)を嵌めます。さらに、反対側が空であることを示したら、そこにテーブル上の1ページ大の新聞紙を取り上げて、筒に当て、箍(タガ)を嵌めようとするのですが、今度は、すでに箍(タガ)の嵌まったタンバリンが重いために、簡単に操作できない様子で、これから箍(タガ)を嵌めようとする側を上にして、一旦テーブルの上に置くことにします。このとき、左手で新聞紙の嵌まったタンバリンを持ってやや観客側に傾け、同時に右手でテーブル上に重ねられた新聞紙を引きます。この瞬間に、左手のタンバリンをテーブル上にあるロード・チャンバーに重ねて置いてしまいます(写真266)。写真は、置く瞬間をマジシャン側から捉えたものです。



写真266

このやり方をスムーズに行なうには、ただの円柱のロード・チャンバーよりも、やや台形になっているロード・チャンバーのほうが適しています。写真では、微妙な台形がややわかりにくいですが、

2種類のロード・チャンバーを掲げておきます(写真267)。



写真267

テーブルの上にロード・チャンバーを置いておくやり方は他にもあって、テーブルの手前の端に近いところに置いておいて、左手に新聞紙を持ち上げたときに、右手で、タンバリンとロード・チャンバーとを一緒にする方法もあります。いずれにしてもタイミングが大事です。

(3)エレベーター付きテーブル

これは、特殊なテーブルで、テーブルの中央に丸い穴が開いていて、マジシャンが足で操作することによって、油圧式のバネで動くエレベーターでテーブルの中央からロード・チャンバーがテーブル上に出て来るものです(写真268)。この場合は、両面を箍(タガ)で塞いだあと、テーブルの上に置くだけで、観客の知らない間にロード・チャンバーが挿入されます。



写真268

ただし、テーブルは油圧式のバネの力が相当に強いので、タンバリンをテーブル上に置いておいただけでは、タンバリンそのものが浮き上がって来る恐れがありますから、両面に新聞紙を箍(タガ)で固定したタンバリンを、テーブル上で、マジシャンの両手で一旦押さえておく必要があります。そして、その間に、エレベーターを上げて、ロード・チャンバーをタンバリン内に挿入させるの

です。エレベーターのスイッチは足で操作できます。私は、このテーブルを奇術用具店から購入しましたが、普通に広く売っているものなのかどうかわかりません。エレベーターの穴の中に入るものであれば、どんなものでも出現させることができます。欠点は、全体が金属でできているので、相当に重いことです。毎晩ショーを演じる職業奇術師でもない限り、タンバリンのために、この重いテーブルを運ぶことはないと思われます。

7. 助手を使うやり方

助手を使ってロード・チャンバーを運ぶ方法は、(株)テンヨーのHPでマリックの巧妙なやり方が解説されていますので興味のある方はご参照ください。タンバリンが大型であるにせよ、小型であるにせよ、助手がロード・チャンバーを運ぶのであれば、これはいろんなヴァリエーションがありますので、あえて、ひとつひとつのやり方はここでは割愛します。

8. タンバリンを台に吊り下げて行なうやり方

これは、1912年に刊行された“CONJURING APPARATUS”(写真269)という本に解説されているものです。すでに“Modern Magic”(1876年)が世に出てから、36年経っていて、世の中には、もう奇術用具を扱う店も現れていました。この本には、タンバリンという手品ではなくて、「ドラムの手品」と書いてあります。挿絵を見ると、タンバリンよりもやや厚い円柱のように見えます。大きさは、10インチ(約25cm)×5インチ(約13cm)と書いてありますから、かなり大きなものです。この中にやや径の小さい2つの筒を互いに重ねて構成するロード・チャンバーを挿入することになります。元の筒の両側に新聞紙を籐(タガ)で付けるのは同じですが、ロード・チャンバーは、椅子の背後に棚(セルバンテ)を付けておいて、そこにセットして置き、広げた新聞紙の陰で、それを椅子の背後から取り上げて挿入するハンドリングになっています。筒の大きさとロード・チャンバーの構造は異なりますが、基本的にはタンバリンと同じです。

さらに、それを改良したものが、「改良されたドラム手品」と題して解説されており、これが、いま述べる「台に吊り下げる」方法です(写真269)。

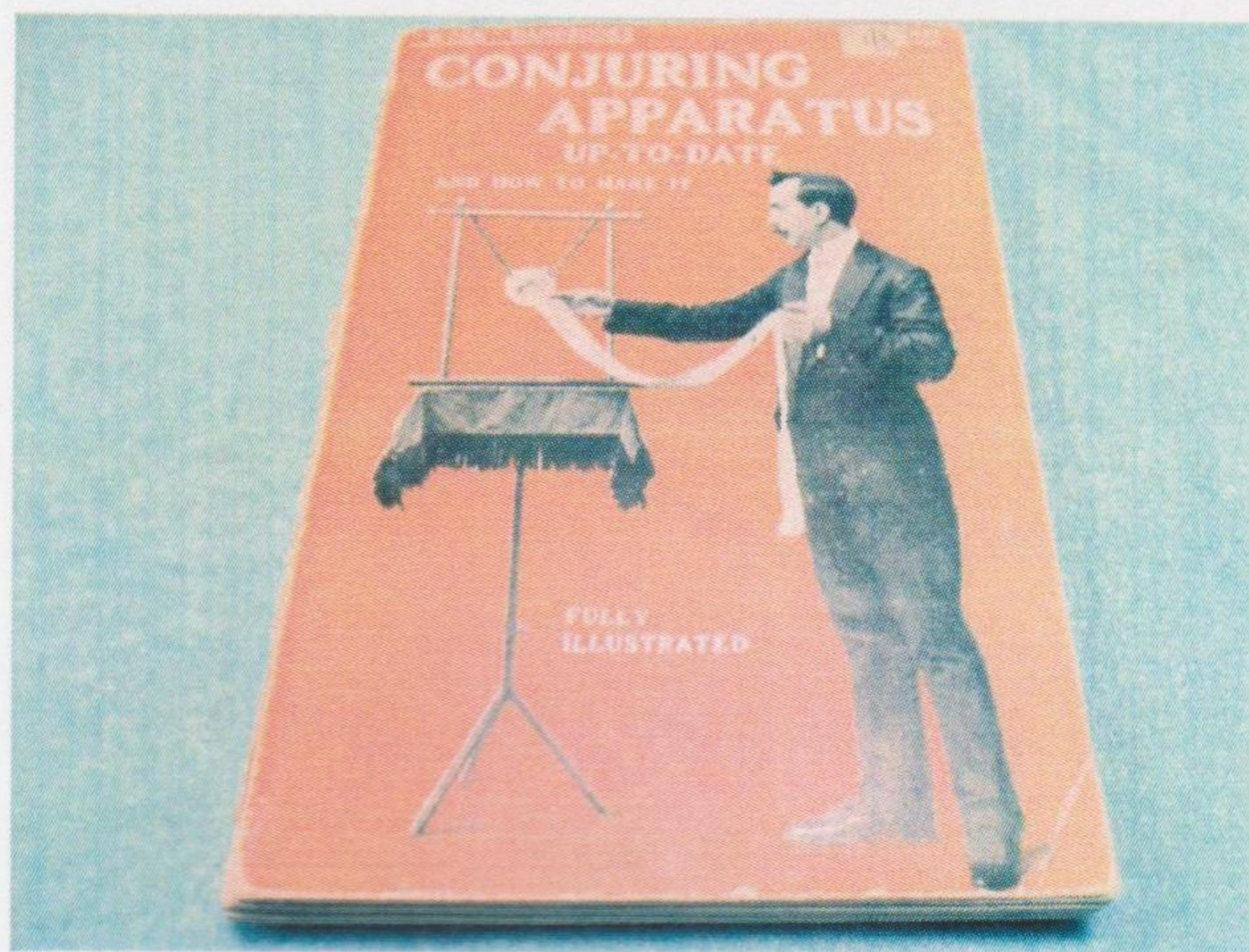


写真269

ここで初めて、「タンバリン」という言葉が登場します。台に吊り下げるのは、いわば空中につり下げられたまま、完全に空であることを示したドラム(筒)の両側に新聞紙を籬(タガ)で嵌めるので、テーブルや他の場所から、ドラムの中に物を運ぶことができないということを暗に示すためです。ドラムの大きさは、径が4.5インチ(約11.5cm)×厚さが2.75インチ(約7cm)と書いてあり、この大きさが重要であるとも書いてありますので、まさに(株)テンヨーや日本奇術連盟のタンバリンは、厚さがやや薄くなるものの、ほぼこの大きさに近いです。

さて、この本には、この「台」の造り方が寸法だけでなく材質も含めて詳しく書いてあります。土台の板はマホガニーとかクルミとか書いてありますし、金属部分も真鍮と指定してあります。もちろん、この通り作る必要はないのですが、1912年には、自分で奇術用具を手作りする人が多かったでしょうから、そのように詳しく書いてあるのです。写真269を見れば大体の大きさはおわかりになると思います。これは、おそらく、パッキングして運ぶために、このようにテーブルの上にセットして作るようにしたのだと思います。もうひとつは、テーブルの下にはセルバンテがあって、タンバリンから出したシルクの中から、クライマックス用の大きなユニオン・ジャックの旗を取り出すために、旗をテーブル下のセルバンテに隠しておきたいのです。そういうことに拘泥しなければ、もう少し自由に台を作ることができます。私は、この寸法や材質の通りには作りませんでした。解説を具体的に行なうために、一応、鎖で空中に吊り下げるタンバリンを作ってみました(写真270)。



写真270

この方式の巧妙なのは、ロード・チャンバーが最初から台に吊るしてあることで、したがって、どこからも運んで来ないことです。解説の便宜のために、この台をフレームと呼ぶことにします。フレームに、空のタンバリンを左右2本の鎖で吊り下げます。籬(タガ)はタンバリンに嵌めておきます。これより高い位置に、ロード・チャンバーを、フレームの横棒の裏にフックを付けて、そこに吊るしておきます。私は、磁石でくっつけておきます(写真271)。そして、このロード・チャンバーとタンバリンの上部が少し隠れるように新聞紙を2枚フレームにかけておきます(写真272)。ここで大事なことは、ロード・チャンバーが完全に新聞紙で隠れることと、タンバリンがあまり隠れないことです。

ハンドリングは、基本的には、「COUNJURING APPARATUS」の記述の通りにしましたが、同書に掲載されている挿絵や写真と合わないところは、自分が実際に演じてみて合理的だと思うほ

うを採用しました。



写真271



写真272

[準備]

ロード・チャンバーの中にプロダクション用の品物を予め入れて、フレームの中央付近に吊り下げておきます。タンバリンは、鎖で左右から吊り下げておきます。これに、ロード・チャンバーが見えないように新聞紙を2枚重ねてかけておきます。

[やり方]

- ①もし、タンバリンを鎖から簡単に外すことができるのなら、一旦外して、ただの筒であることを見せます。外さなくても、ただの筒であることは十分に見せることが可能です。
- ②マジシャンはフレームの前(観客側)に立ち、下げられたタンバリンから箍(タガ)を2本とも外して右手首に掛けます。フレームから新聞紙を1枚だけ取ってタンバリンの後ろ側に当て、右手首の箍(タガ)のうち1本を嵌めます。タンバリンの中は、観客から空であることが見えています。このまま、鎖に下げた状態で、観客側が空であることを十分に示します。「空です」などと言う必要はありません。

- ③次にマジシャンはフレームの後側に立ちます。タンバリンを左手でマジシャン側から持って、フレームから2枚目の新聞紙を取って、そのまま向こう側(客側)に当て、右手首の箍(タガ)を向こうから嵌めます。このとき、ロード・チャンバーが観客から見えないようにして新聞紙を向こう側に回すのがコツです。新聞紙は大きく開いたままですので、この動きの中でロード・チャンバーが観客から見えることはありません。右手で箍(タガ)とタンバリンを掴んだら、左手はタンバリンから放して、下がっているロード・チャンバーを掴み、手前からタンバリンに挿入します(写真273)。挿入したら、タンバリン全体を左手で持って、右手で、余分な新聞紙を丁寧に破り取ります。

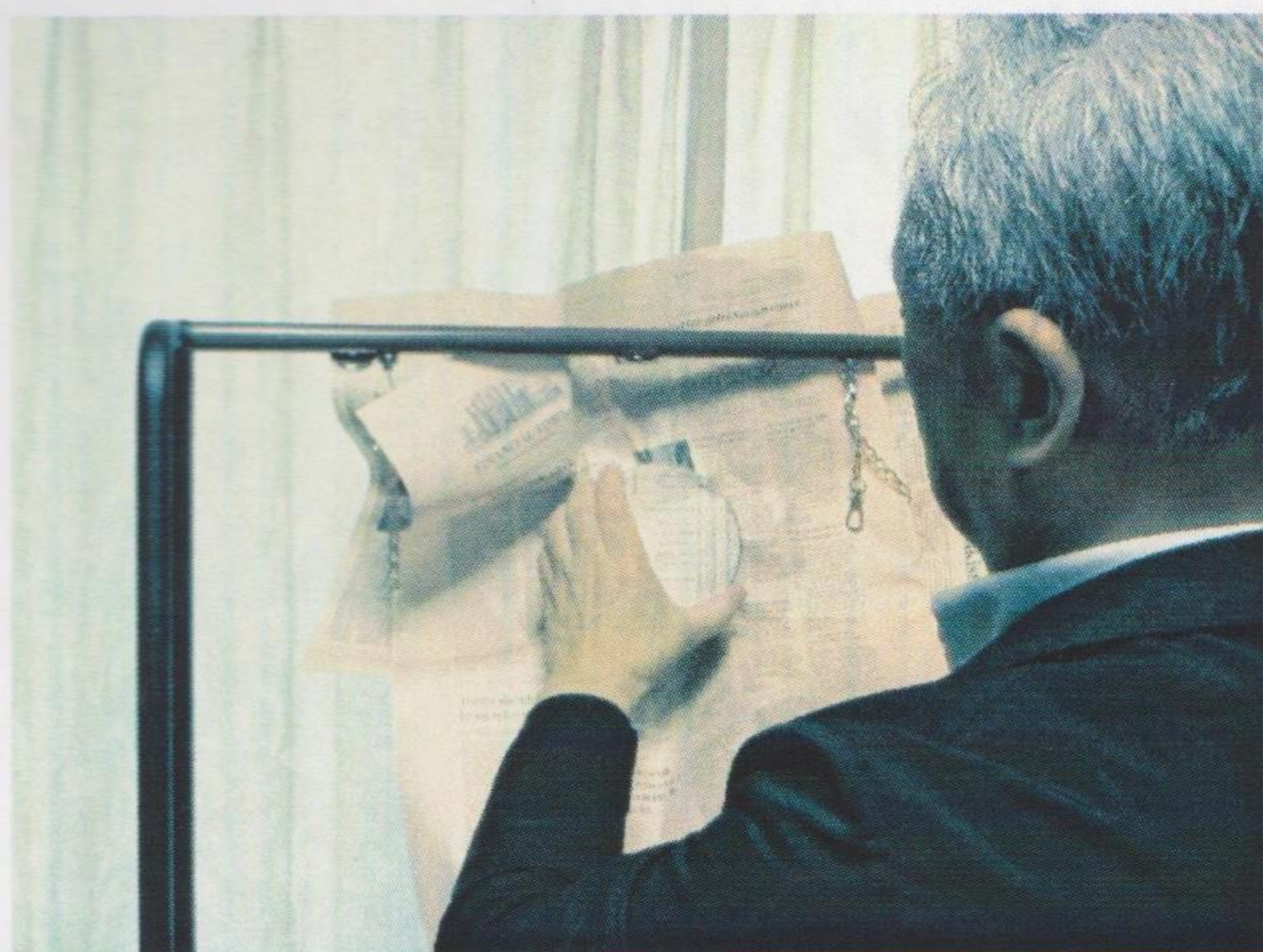


写真273

- ④これで、タンバリンは空中に吊り下げられていますし、マジシャンの両手は空です。客側の新聞紙に穴を開けて、中からシルクなどを取り出します。この場合、テーブルを使っていないので、クライマックス用の旗などを取り出すときには、シルクを棄てるためのバッグなどを用意して、そこに旗などをセットしておきます。

[コメント]

この方法は、なかなか巧妙で、助手も不要で一人で演じることができますから有用だと思のですが、タンバリン単品は商品として売っていても、このフレームをセットにして売っているのを見たことがありません。いろんな奇術用具店のカタログにも載っていないところをみると、あまり人気がなかったのか、テーブルとフレームを携帯しなければならないため、面倒で廃れてしまったのかもしれませんが。2枚目の新聞紙を取るときに、下がっているロード・チャンバーが観客から見えるのではないかと心配な方は、1枚目の新聞紙をタンバリンに嵌めたあとで、そのまま全体をやや上に持ち上げれば、ロード・チャンバーは完全に隠れます。

9. Dr.Albo の本

通常、この手の歴史の古い手品を扱うときは、まず最初に、Dr.Albo の本を参照します。今回そうしなかったのには理由があります。Dr.Albo の本では、第6巻の、“FINAL CLASSIC MAGIC WITH APPARATUS”に収録されていて、タイトルは、“Tambourine Silk Production”と、そのも

のズバリの表現なのです。いわゆる単純なタンバリンだけではなくて、後述するように、タンバリンをかなり広く解釈して、この種の奇術用具を包括的に扱っています。もちろん、すべてが網羅されているわけではありませんが、日本のマニアから見ると、おそらく観たこともない奇術用具がタンバリンとして掲載されています。したがって、最初に、これを扱うと、私の意図した(株)テンヨーのタンバリンを核とした日本のマジシャンや観客に馴染みのあるタンバリンの手品とまったく異なるイメージになってしまうと思い、Dr.Albo は最後の方に取り上げることにしたのです。

(1) 普通のタンバリン

Dr.Albo の本でも、当然、普通のタンバリンは扱っていて、写真や挿絵も掲載されていますが、径の小さいものはありません。また、楽器のタンバリンのように造られたものがあることもこれでわかりました(写真274)。



写真274

(2) 台の下からロッドでシルクを入れるもの

これは、風船カードのように、下部の台に隠してセットしておいたシルクを、支柱に沿って装着されたロッドによって、バネの力でタンバリンの中に背後から挿入するものです。実際の奇術用具の写真(写真275)と、動きの挿絵が掲載されています。いずれも1910年製の商品です。



写真275

(3) ハープ型のフレームに吊り下げたもの

これは、原理的には、前述のフレームに吊り下げたものに近いです。これも1910年の製造商品ですから、前述の解説本の出版年が1912年であることを考えると、この当時、このような機構の奇術用具がタンバリンでは使われていたということでしょうか。ハープのデザインをしたフレームの中央にタンバリンが鎖で吊り下げられている奇術用具です(写真276)。

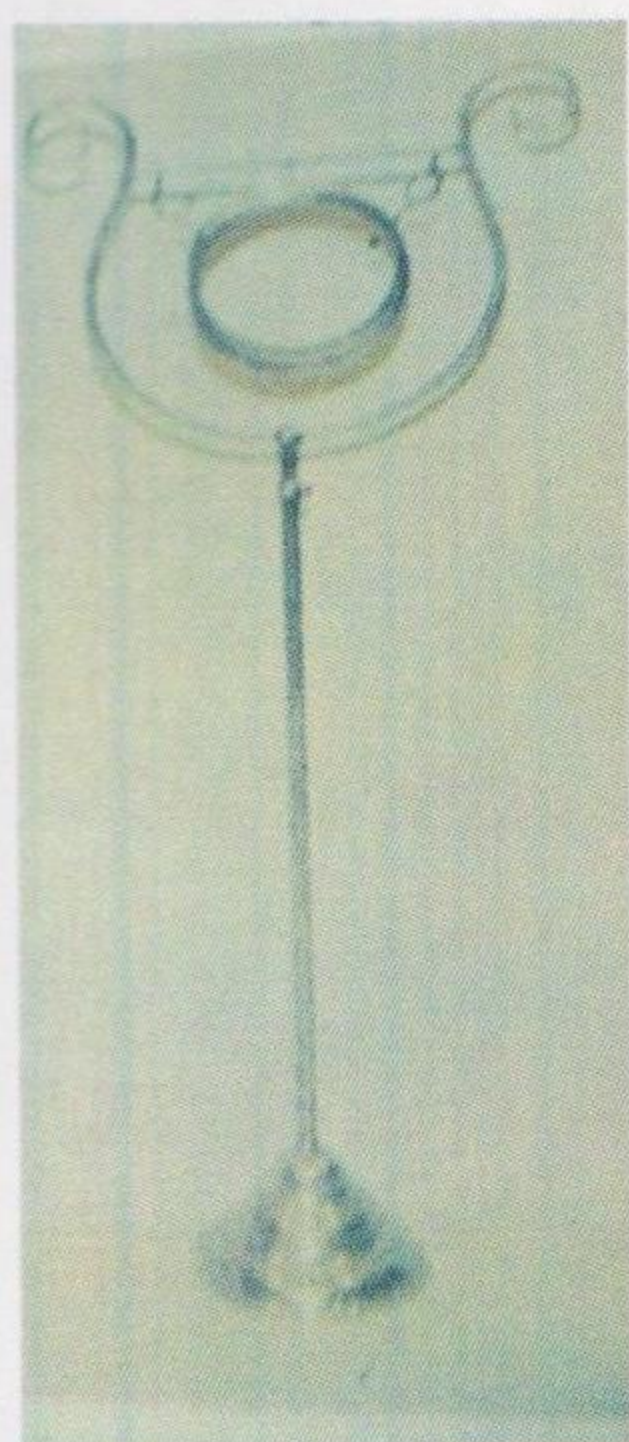


写真276

タンバリンには籜(タガ)が付いています。この写真でも見えていますが、横棒の中央にフックがあって、そこにプロダクション・グッズを詰めたロード・チャンバーを吊り下げます。ちょうど、タンバリンの裏側になります。そして、このロード・チャンバーが見えないように、2枚の新聞紙(解説では大きめのティッシュ・ペーパーと書いてあって、必ずしも新聞紙ではありません)を横棒に掛けます。前述のフレームと異なり、タンバリンとロード・チャンバーはほとんど前後に重なるようになりますから、厚みが観客に気付かれないように、デザイン的にタンバリンがやや前に吊り下げられる構造になっています。ちなみに、ハープは支柱部分で180度回転するように造られています。

まず、タンバリンの籜(タガ)を2つとも外してマジシャンの腕に掛け、1枚目の新聞紙を後ろの横棒から上方へ抜き取って、タンバリンの前面に籜(タガ)で付けます。新聞紙を上方に抜きとるとき、空のタンバリンから背後が見えますから、タンバリンが空であることが観客にもわかります。籜(タガ)に嵌めた1枚目の新聞紙はまだそのままにしておきます。次に、2枚目の新聞紙をやはり上方に抜き取りながら、ロード・チャンバーを後からタンバリンに入れます。ただちに、2枚目の新聞紙をタンバリンの後面に当てて残りの籜(タガ)嵌めます。これでロード・チャンバーの挿入は終わりました。タンバリン前面の余分な新聞紙を丁寧に破り取ります。次に、支柱の上でハープを180度回転させて、タンバリン後面の余分な新聞紙を丁寧に破り取ります。

このタンバリンは、180度回転することによって、面のどちらからでも、シルクや万国旗を取り出すことができます。サイズの記述がありませんが、前述のフレームよりはかなり大きなタンバリンを使える印象を受けます。したがって、シルクの量も多いはずで、そうでなければ、シルクの手品の項に掲載されるはずがありません。面白いのは、この時代(1910年ごろ)は、タンバリンでテープの取り出しがないことで、いつからテープになったのか興味のあるところです。

10. ドラム

これは、タンバリンではありませんし原理的にはまったく異なるものですが、タンバリンも、もともとは「インディアン・ドラム」などと呼ばれていた時期がありましたから、ここで扱うことにしました。かつては日本でも広く販売されていました。製造していたカナダのメーカーが奇術市場から撤退してからは、ほとんど見かけなくなりました。小さなタンバリンが台の上に載っているような奇術用具です(写真277)。価格もそんなに高くはなかったと思います。



写真277

ドラムと台は取り外しができるようになっています。ドラムはタンバリンと同じように、筒と箍(タガ)とからなっており、両面にそれぞれ新聞紙もしくは紙を当てて、箍(タガ)で固定します。ロード・チャンバーはありません。シルクは台の中に入れておいて、テグスなどをシルクの端に装着して、それをドラムの底から引っ張り出します。ドラムには側面の底に穴が開いていて、そこに台を固定するようになっていますから、台に入れておいたシルクをその穴から引っ張り出すことになります(写真278)。

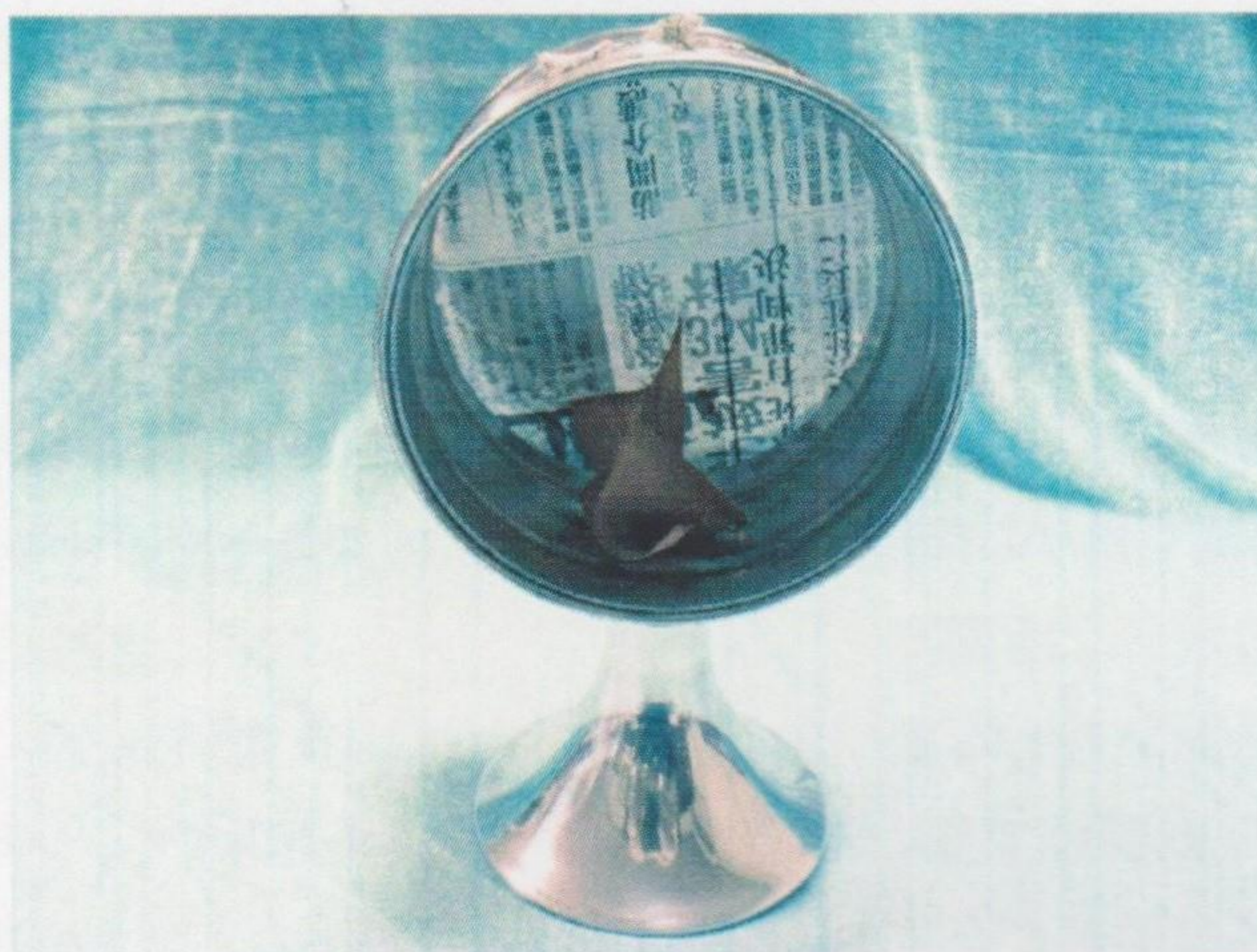


写真278

台の容量はそれほど大きくはありませんので、シルクをたくさん出すことはできません。しかし、ロード・チャンバーがないので、ドラムそのものはかなり公明正大に扱うことができます。

11. コメント

タンバリンを総括的に扱いました。実際のシルクの取り出し方とか、テープの巻取り方などは省きました。テープを巻くときは、棒(マジック・ウインド)の先端に両面テープを巻いておくといいと、(株)テンヨーのHPに書いてあります。棒の先端に輪ゴムを巻いておくといいと言う人もいます。テープの量は練習してみて自分で決めるしかありません。ダンシング・ケーンと同じで、回している本人は面白くていつまでもやっていますが、観客はすぐに飽きます。マジシャンが、ちょっと早いかな、と思うところで止めるのがちょうどいい頃合いです。

シルクやテープの束から、大きな旗を出したり、鳥籠を出したり、あるいは傘や金魚鉢を出したりするクライマックス部分も省きました。シルクの束やテープの束でカバーしたクライマックス品をテーブルや捨てバッグの下や背後にセットしておいて、出現したシルクやテープと一緒に持ってステージの前に来て出します。世の中で、プロマジシャンもアマチュア・マジシャンも大勢の奇術師がいろんな場面で「プロダクションもの」を演じていますから、観れば、クライマックス品の出現は大体のことはわかりますので、それを参考にされたいと思います。

タンバリンの価格ですが、小型の日本の商品は12000円~2万円です。海外の商品も小型のものは、1万円前後です。大型のものはもともと新品で製造販売している奇術用具店が少なく、販売価格も約4万円~約7万円します。Merv Taylorなどの古いものはオークションで見つけるしかありませんが、落札価格は相当に高いです。

なお、手品市場には独自に製作したと思われるサイズのものや、かなり深い(厚い)ものなども出回っていますし、逆に、径が6cmくらいしかない小型のものや、コインなどを出すコイン・タンバリンというものなども販売されています(写真279)。



写真279

以上でタンバリンは終わりです。この原稿を書くために蒐集したタンバリンの数は30を超えます。私は蒐集家(collector)ではありませんので、風船カードのようにロッドで挿入するものや、ハーブの形をしたものは、オークションで見たことはありますが、入札はしませんでした。このほか、取り上げなかったものに、中国の銅鑼のようなデザインをしたタンバリンもあります。これもオークションで見たことはあります。かなり特殊なものなので割愛しました。

コーンとボールの考察

麦谷眞里

(まえがき)「コーンとボール」に関して私の手元にある日本語の解説書は「ホーカス・ポーカス・シリーズ」第7巻(1960年)と「奇術研究」第38号(1965年)の2冊です。他に、ケン正木氏が解説されたDVD(発行年不明)があります(写真280)。渋谷慶太氏もDVDを出されていますが、手順は基本的に氏の師匠のケン正木氏のものと同じです。



写真280

「コーンとボール」が「バーノン・ブック」で解説されたのは1957年でした。昭和32年ですから、それから3年後の昭和35年、日本で、「ホーカス・ポーカス・シリーズ」(力書房)の第7巻として「コーンとボール」が日本語で刊行されたことは驚くべきことです。この驚きには2つの要素があります。ひとつはもちろん、その翻訳刊行スピードの速さです。当時、洋書を手に入れることそのものが容易でなく、いわんや、欧米でも一般の書店に並んでない手品という特殊カテゴリーの書籍を手に入れるのは至難の技でした。もうひとつは、あの「バーノン・ブック」から、この「コーンとボール」を選んだ選択眼です。選択して翻訳・紹介したのは、言わずと知れた高木重朗氏です。これは、小野坂東氏が証言していることですが、その当時、手品の洋書はとても高価で、普通の市民には入手が困難でした。購入するにしても、現在のように個人で直接注文することはほとんど不可能で、洋書を扱っている丸善などを通じて購入しなければなりませんでした。外国から直接個人で購入する場合の最大の障害は支払いでした。加えて、1ドルは360円の時代です。東京のアマチュア・マジシャンの中で比較的富裕な方々が丸善を通じて注文し、届くと、当時まだ20代だった高木重朗氏に渡して読破・習得してもらい、内容を教えてもらいつつ日本語に翻訳してもらっていたということです。そういう意味で、「バーノン・ブック」を始めとする当時の最先端の手品の洋書は、ほとんど高木氏の目に触れることになり、力書房の刊行物を通じて全国のマニアに伝えられます。ちなみに、力書房の「奇術研究」が創刊されたのは昭和31年(1956年)です。「奇術研究」は会員頒布の雑

誌ではなく、町の書店で普通に売られていた雑誌でした。手品は、いまでもそうですが、マニアはそのタネをできるだけ秘密にしておきたいものです。それを、誰でも気軽に手に取れる本屋で公開したことは、ことの功罪を鑑みるに、圧倒的に功績の方が大きかったと私は思います。「高木重朗」という存在がなかったら、日本の奇術界がここまで発展することはなかったと思います。

話が横道に逸れました。「コーンとボール」に戻ります。バーノンの発表以後、世界でいろいろな手順や使い方が発表されました。コーンを1個ではなく複数個使う手順もあります。ボールも複数個や色違いのものを使う手順もあります。コーンの形や大きさ、ボールの大きさなどもまちまちで、いまさらながら、多くの奇術家の関心を集めた手品でした(写真281)。



写真281

したがって、いまさら屋上屋を重ねるようなことをするのは本意ではありません。今回取り上げたのは、バーノンの基本技法をおさらいすることと、「コーンとボール」の手順を構成するとき何が重要かを改めて考察することです。

倒叙的になりますが、後者から先に述べます。もともとは、カップ・アンド・ボールをステージで演じることができないか、という発想から生まれたということですから、カップ・アンド・ボールの現象を踏襲するのが理想です。この場合、現在、ラスベガスでマット・フランコがやっているように、ステージ上にテーブルを設えて、その上で行なうカップ・アンド・ボールの演技を大きなスクリーンに投影することは想定外とします。ギャンソンもバーノンもまさかそんな時代が来るとは思いもしなかったことでしょう。

したがって、テーブルを使わず、3つのカップの代わりに一つのコーンを使い、ボールの消失や出現及び移動現象を見せることになります。クライマックスには、カップ・アンド・ボールのようにレモンなどを出すことができれば爽快です。そこで、ボールの色変わりの代わりにレモンを挿入することにします。全体像から見れば、ボールの消失と出現、そして、ポケットとコーン間の移動、最後にレモンの出現という構成になります。

それでは、基本技法をおさらいします。

バーノンが使っているボールは径5cmの大きなものです。コーンは革製で、大径が8cm、小径が1.5cm、高さが15cmです。この通りの寸法でなければならないことはありません。

[基本技法]

- ①左掌にボールを置きます。位置は、中指と薬指の第二関節の上です。どちらが第一関節でどちらが第二関節かわからない人のために解剖学的な指の関節の図を示しておきます。PIP 関節と呼ばれるものが第二関節です(写真282)。

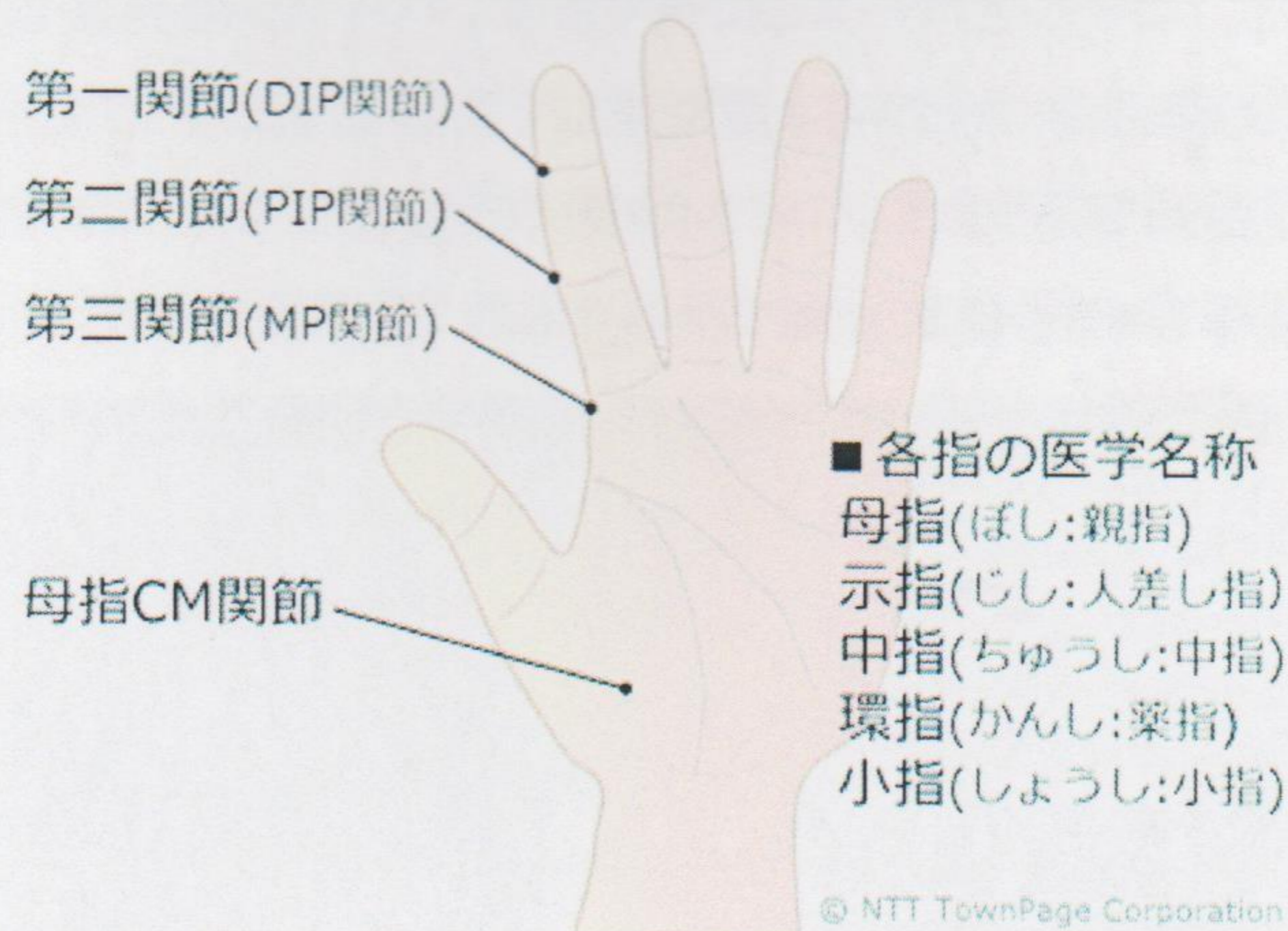


写真282

- ②右手でコーンを持ちますが、掴む位置は、親指をコーンの底の手前で、人差し指と中指を反対側の底の縁を持ちます。右薬指は中指に付け、右小指は自由に動かせるようにしておきます(写真283)。このとき、コーンの上部の小径は、観客側を向いています。

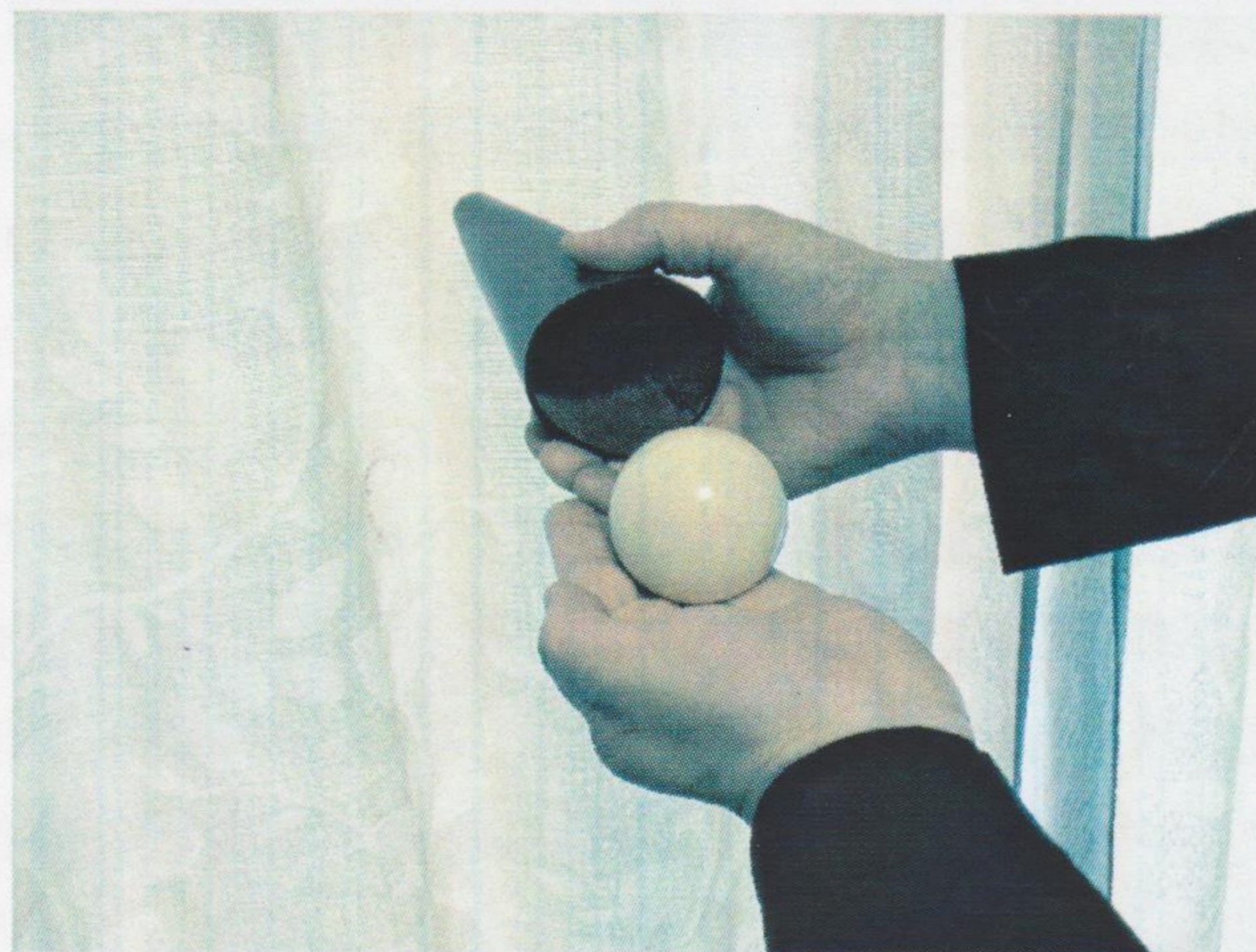


写真283

- ③このままコーンを手前に傾けて回転させればコーンはボールに被さります。そうしないで、コーンを手前に傾けながら、左中指を気持ちだけ上げ、同時に左薬指と小指とを下げます。すると、ボールは自動的に転がって、左小指で右掌に押しつけられることとなります(写真284)。実際にボールを掌に載せてコーンを動かしてやってみると、このことはよくわかります。
- ④左親指は動かしません。観客からは、コーンと右手の陰になってボールが左手から右掌に動いたことは見えません。よく見かける間違いは、ボールを右手にパームさせようと思って左手を右に傾けることです。左手は傾けず、左親指も動かしません。指の上下だけで、ボールは自動的

に右手に入ります。

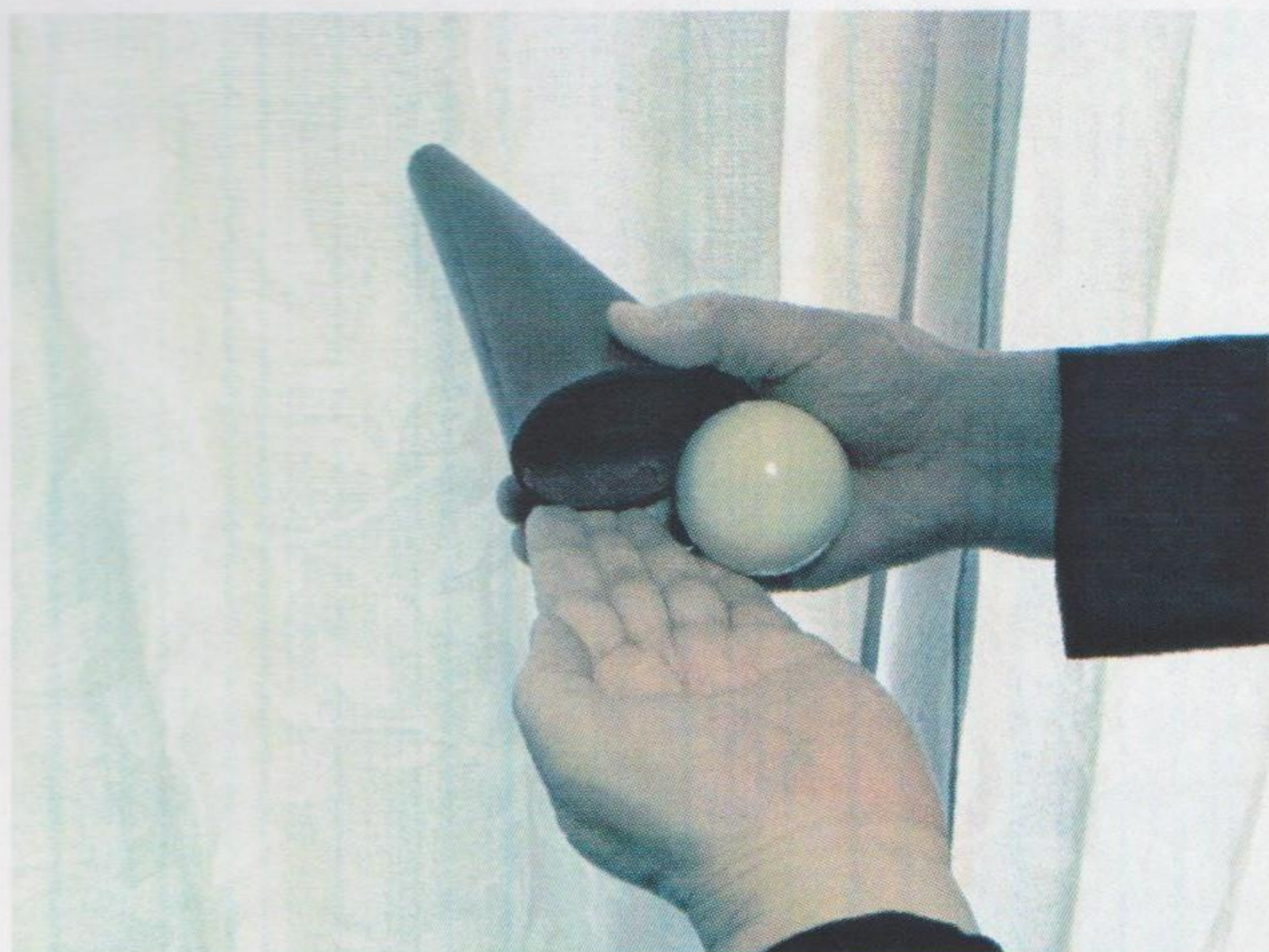


写真284

- ⑤左小指でボールを右掌に押しつけながらコーンを立てます。右手は、ボールに被さるようになり、右掌のパームできる位置に来ます。これで、コーンが立って、右手はボールをパームして左手から離すことができます(写真285)。同時に、左小指を元に戻します。

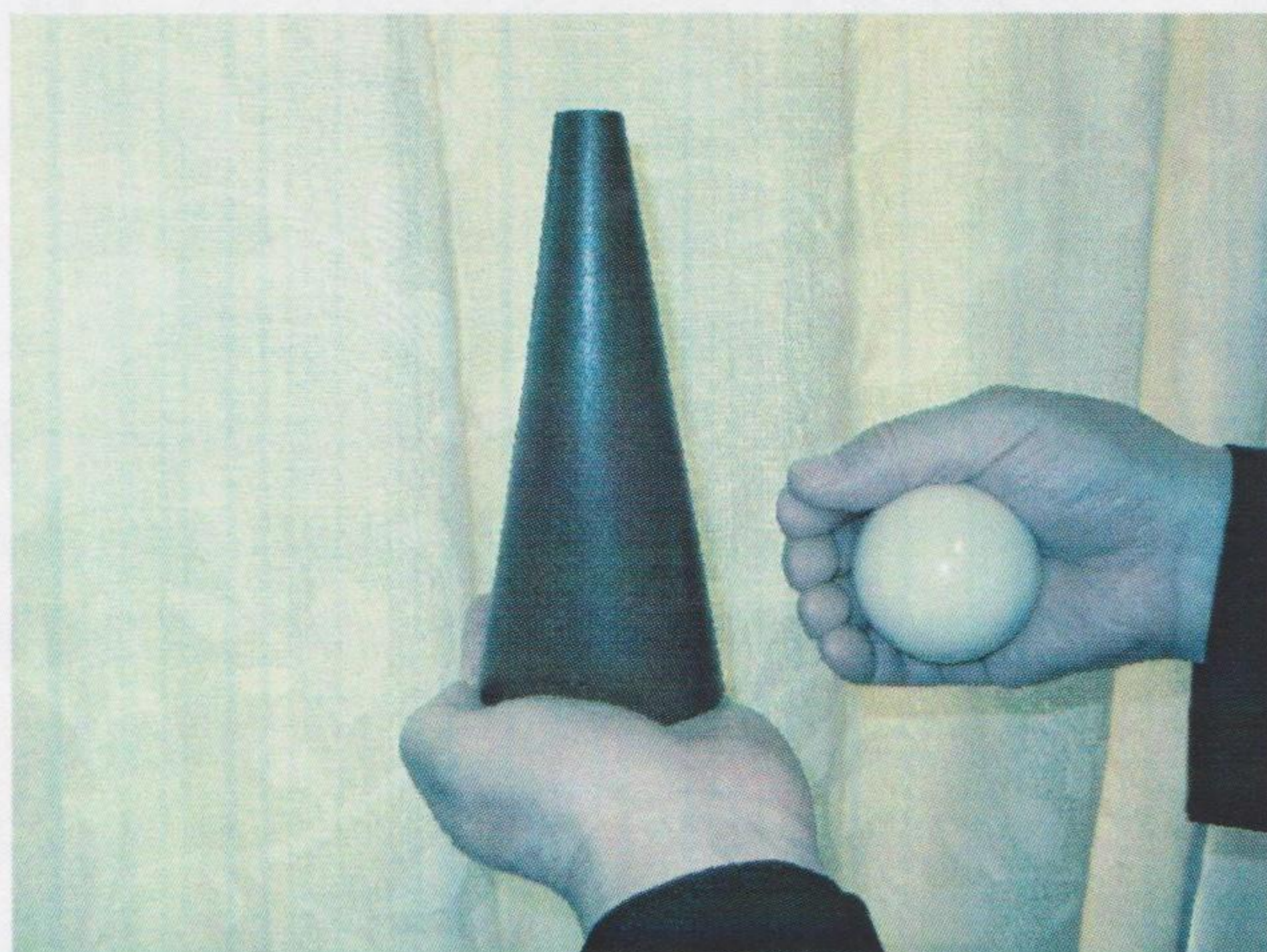


写真285

[手順について]

バーンの手順は、ハーレクインのスタイルで、ナイト・クラブやキャバレーなどで行なうときの手順で、かなりプロ仕様のもので、コーンとボールの扱い以外にも技術が必要です。そこで、手順をボールの消失と出現とクライマックスとに簡素化してみました。

[必要なものと準備]

上着の右ポケットに、レモンを1個入れておきます。

[やり方]

- ①コーンを左手に持ち、白いボールを右手に持って示します。左手のコーンは底を観客の方に向

けて空であることを示します。同時に、右手の白いボールも親指と人差指とで持って示します。ここで、左手のコーンと右手のボールとを交換します。交換したら、ボールを左手の上に置きます。基本技法の位置です。右手のコーンを本当に左手のボールに被せます。一旦、観客のほうを向いて、再び右手でコーンを持ち上げます。ボールはそのままです。もう一度右手のコーンを左手のボールに被せますが、今度は、基本技法で右手にパームします。

- ②左手のコーンを空中に投げ上げて、ボールが消失したことを示します。同時に、右手を上着のポケットに入れて、レモンをパームして、パームしていたボールを指先に持ちつつ出して来ます。
- ③左手のコーンの中を見せたら、底を上にして左手に持ちます(写真286)。



写真286

- ③右手の指先のボールを空中に投げ上げ、これを左手で受け取りながら、左手のコーンを右手に渡します。コーンの口が上になっていますから、このとき、レモンをコーンの中に落としこみます。
- ④ボールを左掌の上に置きます。これに右手のコーンを被せながら基本技法で、ボールを右手にパームします。観客は、コーンの中にボールがあると思っています。
- ⑤右手にボールをパームしたまま、コーンを持ち上げてレモンに変化したことを見せます。パームしているボールはこのとき、右手を身体の脇に下げて、コーンの中に落とします。左手にレモン、右手にコーンを示してオシマイです。

[コメント]

バーノンの手順から見ると、ずいぶん単純になったと思われるかもしれませんが。これは私の偏見ですが、ハンカチーフを使ったり、ボールを上を絞ったりする手順は、けっこうハンドリングが難しい割には、観客に受けないような気がします。カップ・アンド・ボールは、ハンカチーフの使用とかボールの色変わりはないわけですから、単純な手順でいいと思ったのです。

これは、masquerade part9 の No9です。

連絡のメールアドレスは、masqpart4@aol.com です。

2023年7月